

中国のタクシーの車窓から

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役

土田 浩

中国に出張し、広東省4都市（広州、^{ドンガン}東莞、^{シンセン}惠州、深圳）と上海を5日間で駆け足で回ってきた。

中国の社会・経済情勢については、仕事柄多くのレポートを読んでおり、専門家の講演を聴く機会も多い。しかしながら、私自身は、中国で現地企業と面談するのは初めてで、観光旅行したのも14年も昔という素人である。今回の中国訪問の目的・成果などは別の機会に譲るとして、ここでは即興で素人の新鮮な印象を綴っておきたい。

△今回の出張では、移動手段の大半がタクシーであった。空港、訪問先、食事・宿泊、広東省内の都市間など、その都度タクシーを拾って目的地に向かった。

最近、中国はキャッシュレス先進国として知られる。中国のシリコンバレーと称される深圳などでは、運転席にぶら下がったQRコードを乗客が読み取ってスマホで送金し、運転手がそれを確認する。それなりに手間がかかるように見えたが、それは現金の取り扱いに習熟した日本人の感覚かもしれない。中国人にとって現金とは、偽札の横行や釣り銭を揃える手間など、結構煩わしい決済手段だったのである。

ただ、現時点ではまだタクシー代金は現金決済という都市もあった。キャッシュレス化一つとっても都市によって区々なのは、急速な変化の真最中ゆえのことだろう。「中国では」というステレオタイプの理解を鵜呑みにする危うさを現地で味わった。

中国のタクシーは低料金・高稼働率で、流しのタクシーは見当たらない。タクシーを呼ぶにはスマホアプリが必需品である。早ければ1分以内で応答が来る。ところが、実際にはタクシーが到着するまで20分くらい待たされたこともあった。こちらに向かうタクシーが激しい渋滞に巻き込まれてしまったのである。どこ

へ行くにも道路渋滞は深刻で、約束の時刻を守るには相当な余裕を見込まなければならない。ICT化がいかに急展開しようとも、日本でのような精緻なスケジュールを組むのは遠い夢の世界なのである。

ついでながら、渋滞の中でのアグレッシブな運転には、驚愕と緊張の連続だった。僅かな車間への割り込み競争、対向車を大胆に遮ってのUターン。よくぞ事故に遭わずに済んだものだ。ある日本人駐在員が「(中国は)食事は旨いが、車の運転マナーが耐え難い」と話していたが、全くその通りだと思った。世界の自動車メーカーは、自動運転車の開発に邁進しているが、一口に自動といっても、中国では一体どんなプログラムが搭載されるのか、興味津々である。先端技術の進歩はスピードを増しているが、その社会実装を規定するのは、各国の社会文化の有り様なのだ改めて実感した。

もう一つついでだが、深圳の地下鉄乗り場には、荷物のX線検査装置が設置されていた。乗客は全員そこを通過しなければならないが、朝夕の混雑時には大変な行列になるそうだ。折しも広州・香港間の新幹線が開通した。47分で結ばれることになったが、乗車するには出発1時間前に駅に到着しなければならないと聞いた。日本が万全かという議論はさておき、何事につけセキュリティチェックを要する社会構造の下では、高度なインフラシステムが導入されても、その恩恵を十分に享受できない現実を目の当たりにした。

△今回、深圳では、第4次産業革命の先端を走るソフトウェア産業基地、新コンセプトのハイテク食品スーパー、世界最大のドローンメーカーのショールームなども視察した。日本で紹介されている通りの先進性であった。その一方で、これらを社会に浸透させるためには様々な課題を乗り越える必要があることも随所に垣間見られた。

第4次産業革命の果実は、「先進国」中国ではいつ頃どのような形で結実するのだろうか？ 中国の後塵を拝する日本ではどうだろうか？ 中国社会の変化のスピードの速さは、日本人誰もが舌を巻くところだ。2～3年後にもう一度同じルートを辿って、中国社会のダイナミズムを確認してみたい。